

東京多摩地区現代俳句協会

多摩のあけぼの

会報 No.153



『武蔵野探勝』を読む

大石 雄鬼

昭和五年八月、高濱虚子率いるホトトギスのメンバーによる「武蔵野探勝」が始まる。府中から鶴岡八幡宮まで八年五か月間にわたる毎月一回の計百回の吟行句会である。その様子は毎回筆者が変わり、「ホトトギス」に連載され、まとめられたものが昭和十七年に『武蔵野探勝』として出版された。その序文で高濱虚子は次のように書いている。「実際郊外に出てみると、明治二十五、六年の武蔵野と大分変化していた。舗装道路が野を貫き、電車の線路が縦横に走り、森や林は伐り拓かれて人家が立ち並び、花芒が一面に畑になっていて、昔日の武蔵野を見ることができない。けれども、神社仏閣、山川湖沼、その他とところどころに残つてをる名勝非名勝の地を探つて、そこに武蔵

野の名残を求め歩いた。また、題詠が多かつた当時、新たな風として吟行による俳句を増やす必要を感じていたのかもしれない。

昭和五年八月二十七日の府中市の櫻並木から、百草園（多摩の横山）、手賀沼、平林寺、小金井、流山と続いていく。私が府中に住んでいたこともあり、九十二年前と同時期・同場所を吟行し、どのように感じ、どのような俳句ができるか、試してみようと思ひ立った。当時は昭和五年、今は令和四年とほぼ同年であるという奇遇も面白く、また季節を合わせるため、日単位で日程を合わせ、俳句仲間とスタートを切った。

序文では、「名勝・非名勝の地」と書かれていたが、前半は名勝の句である時期には行っていない。それに気づいたのは、第五回的小金井の吟行のときであった。私は全く知らなかつたが、当時、小金井は桜の三天名勝の一つで、桜の時期は大いに混みあつたようである。名勝を廻るならば当然、桜の咲く時期に行くべきであるが、真冬の十二月三日に行っている。虚子は「これでも、春の花時に来ると嫌になりますよ」と言っている。虚子というと「花鳥諷詠」がすぐに浮かぶが、その意味はど

多摩風土記（西武上水線②）
今尾恵介著「地図で読む戦争の時代（増補新版）」によると、戦時中の昭和十八年（一九四三）に陸軍兵器廠小平分廠と専用線が造られた。戦後その跡地はブリチストン東京工場となり専用線も使用された。その後は西武鉄道上水線（現拝島線）が萩山〜小川間と接続することとなり、この専用線はその一部として利用されているという。（健介）

ちらかというのと、生活する人に関わる花鳥諷詠であり、特にスタート時はそこに暮らす人々に関心があるようだった。第一回「櫻並木」では虚子自身が執筆、その府中の様子を「警察署の向かいのところに、青天の下に椅子卓子を出して、インキ壺にペンをひたして仕事をして居る人がある。其隣には床屋の親爺と水屋の男とが将棋をさしてをる」などと描写している。

事務とるも涼み将棋の櫛かけ

虚子

ちなみに、府中の中心と言えば大國魂神社であるが、その描写、俳句はほとんどない。花鳥の句の時期を避けるかのような吟行。第二回の百草園は九月三十日という木屋が咲いている程度の時期。第三回の手賀沼は十月八日、行々子などの夏鳥が去り、まだ冬の水鳥が来ていない中途半端な時期である。第四回の紅葉が売りの平林寺には十一月九日の紅葉の時期に行くが、「こんなところにおいては俳句はできませんね」と言つて、寺を出て雑木林を眺めながら草の土手に休む。「やつぱりあの土手に休んでいた時が一番気持ちよかつたですね」と最後に虚子。第六回の流山は、江戸川に寒鮎釣りを探しに行くという変な回。結局見つからず、蘆刈を見て帰ってくる。ところで、全体的に渡し船に乗ることが多い。今では乗る機会は観光地程度でほとんどないと言つてよいが、当時は至る所にあり、向こう岸に行こうと頻繁に乗っている。

第七回の浮間舟渡では野焼を始めてしまう。火が広がりそうになり慌てて消したり、ついには燃え広がり地元の人々が消してくれる。今ならニュースになりそうな一件である。

笑ひ声きこえて草を焼いてをり

虚子

ここで、参加メンバーとその年齢に触れてみる。第一回目の府中は、高濱虚子（五十五歳）、富安風生（四十五歳）、水原秋櫻子（三十八歳）、星野立子（二十七歳）など、二十三名の参加であった（回を重ねるごとに増え、第百回では五十人近くになった）。なお、水原秋櫻子は第十二回の粕壁を最後にホトトギスを離れる。粕壁は秋櫻子の居住地であり、秋櫻子おすすめの鰻屋でおそらくお別れ会。

山口青邨（三十八歳）は第二回から参加しているようである。このようであるというのは、全ての参加者が必ずしも表記されているのではなく、基本的にそのときの吟行の様子、虚子の句と虚子の選に入つた句で構成されている。虚子選に入らなければ名前が載らないので、青邨が一回目から参加していたかどうかは定かではない。また、各回披露までで講評は行われていないようである。

高野素十（三十七歳）の参加は、第八回の青梅から。そして、この回の執筆担当であるが、口が悪い。「青梅の梅は大したことないな」「こんどはもう少し物語りとか由緒のある所とかへつれて行って貰いたいな」と書いている。素十は結局かなりの回数参加しているが、ドイツに留学のため第二十八回から第五十三回まで不参加。その後、新潟から何回か参加している。

中村草田男（二十九歳）は第九回の下高井戸から参加。草田男はどれも悪戯好きらしく、第四十一回の立川・普濟寺の回では執筆担当で、「肉体が極度にあつたかくなると、僕の心は次第に陽気になって来た。一種の悪戯っ気が湧いて来たのだ……」

大きな青大将の抜け殻が手にいったので、中門の入口へ長々と横にして、飛ばないように小石を置いておく。併し誰も愕かかない」と自ら書いている。この吟行の時、次の句ができています。

冬の水一枝の影も欺かず 草田男

また、草田男は第四十三回の虚子還暦祝いの席で「藁の油の口上一席、当意即妙の文句、節廻し鮮やかにやってのければ、満座の拍手喝采しばし鳴りやまず、『草田男また呉下の旧阿蒙にあらず。』の声盛に起る」とある。注目されていたことがわかるし、その後の草田男のイメージからは大きく離れている。※なお、()内の年齢は、第一回開催の昭和五年八月を基準にしている。

ここからは、全体の印象である。最後の方で気づいたのだが、季語の使い方がけっこうルーズである。ルーズというと誤解を招くが、暦よりも写生を重視した季語の選択であり、かつ季重なりも厭わない。まず、吟行会が各月の月上旬に設定される結果、二十四節気の微妙なところで開催される。八月は毎回立秋の前後で開催されるが、一つの回で夏、秋の句が入り乱れる。極端な回を言えば、第三十八回は立秋を一月月過ぎた九月三日に開催されたが、(蓮池や釣する傍に髪洗ふ 虚子)(百姓の仕立ててくれし蓮見舟 風生)もあれば(沼舟の沈める岸の野菊かな 莉花女)(鄙びたる秋の団扇をつかひけり 夢香)もある。また、第八十三回では(子蟪蛄に青鬼灯の林かな 清三郎)(病葉の散り斑猫の飛びにけり 白山)(黒揚羽せはしくなりぬ花石榴 定祥)など季重なりがけっこうある(と書く)と、それは虚子は取らないでしょ、と考えるが挙げた句は全て

虚子選の句である)。

私の印象では、花鳥諷詠よりも客観写生、実物重視というところであり、そこにあるものは、暦上は秋であっても(たとえ九月でも)、夏の季語を詠んでよいという印象である。これらは句集、歳時記では気づかないことだが、吟行句をまとめたものであれば、いつ作られたか明確にわかる。

吟行地については、前半こそ武蔵野の光景が残っているところを廻り、また農作業としての茶摘や養蚕を見学していたが、中盤は隅田川の蒸気船、都内の遊覧バス(後のほとバス)に乗ったり、軍艦の内部、ビール工場、デパート(高島屋)、日活撮影所、東村山の全生病院(ハンセン病療養所)、冷凍工場、漁船での漁などを見学している。特に遊覧バスでは、参加者はバスガイドに男子高校生のように色めき立ち、バスガイドの句を虚子が取らないと不満を書いているのがおかしい。蒸気船では虚子が次の句を作っている。

川を見るバナナの皮は手より落つ 虚子

また、終盤においては、観光地的なものが多くなり、花鳥諷詠の句が増えてくる。第八十回は真間山弘法寺を吟行。あの有名な句が生まれる。

まさをなる空より枝垂桜かな 風生

以上、百回のうち、虚子は根太(腫物)で一回休み。そのあと、洋行で連続四回休んでいるが、もちろんメンバーの中では百回中九十五回と最多の参加であった。

ところで、私とは言えば、二十か所ほど回った。いつになったら百か所廻れるかはわからない。(軍艦は入れないし……)

あけぼの集

年の瀬や復活目指す能登の塗師 八王子 青木 隆
 寒鯉のあんたが王か太々し 八王子 赤野 四羽
 小さき手のちさきぬくもり草の花 国分寺 秋山ふみ子
 顕微鏡鳴き砂の海秋のぞく多 摩 足立喜美子
 泣く嬰の口中深し天の川小 平安達 昌代
 コンビニへ入る人出る人紅葉枯る清 瀬 穴原 達治
 秋の蚊が握り拳の中にいる稲 城 新井 温子
 霜月や面影浮ぶ喪の葉書 八王子 荒川勢津子
 ラーメンに煮豚ひときれ初時雨町 田 有坂 花野
 「If I must die」戦火に潤む月の暈 狛 江 有原 雅香
 存問の生成 A I 秋の暮 国分寺 安西 篤
 冬の虹消えて心にたたむ彩足 立 飯田 和子
 晩秋の十和田湖怖いほど静か 東久留米 飯田 玉記
 冬晴やだったん蕎麦の胡桃汁多 摩 石川 春兔
 本家の獅子柚子し瓶は大叔母へ小 平 石橋いろり
 落日の色消えつくし冬の空練 馬 石原 俊彦
 寂しさや能登霜月の水平線 八王子 市川 春蘭

冬 隣 靴 音 乾 く 舗 装 道 青 梅一ノ瀬順子
 日用の眼鏡直って冬うらら日 野 一関なつみ
 見おぼえのある看板と猫の冬 狛 江 伊東 類
 五郎助や二次元コード分け入れば町 田 稲吉 豊
 兄入学入れぬ二男八つ当たり町 田 今田 述
 紅葉かつ散るころのメモが蘇る京 都 岩佐ひすい
 デジタルの世の眼に疲れ花八手 武蔵野 内田 牧人
 暮早し鳥の横顔ふと見たり 武蔵野 江中 真弓
 獺犬放ち未来の言葉届くのか府 中 大井 恒行
 心臓を木の葉のやうにして眠る府 中 大石 雄鬼
 どんぐりの落ちて一瞬沼凹む日 野 大槻 正茂
 秋深し片隅の辞書触れぬまま 八王子 大谷みどり
 もめごとを丸めてしまいかまど猫川 崎 大西 恵
 父と酌む焼鳥のやや焦げてをり三 鷹 大森 敦夫
 真珠湾忌十七音詩握りしめ照 鳥 岡崎たかね
 キャンパスはホワイト樅ノ木冬構三 鷹 小川 葉子
 立冬や天変地異と暮らしつゝ、飯 塚 奥野 亜美

あけぼの集

日脚伸ぶ雑木林に耳澄まし川崎尾崎 太郎
 生家なき里は遙けし花八手昭鳥尾関 英正
 愚痴こぼす相手なき日の檸檬かな青梅小野こうふう
 咳ひとつ奥に怒りを含みをり立川片倉みちこ
 かたむける備前德利や山眠る日野亀津ひのとり
 オペ臨む八十路の夫に秋の薔薇西東京河 順子
 天災人災いくさはいらぬ秋の水立川川島 一夫
 ホモ・サピエンス無季も耕してきた大田川名つぎお
 葡萄直売にわか作りの棚二ヶ所清瀬神崎 幸子
 どの窓も明日を見る窓冬夕焼小平城内 明子
 冬の波入管といふ崖に遭ふ熊本貴田 雄介
 紅をさしかばちや煮抱え母来たる大田小泉満知子
 つつぱり棒ポトンと落ちる小春かな三鷹高坂 栄子
 鴨道や明け渡りたる雲場池小平後藤 行雄
 鳥渡る特攻兵の端正な遺書府中小林 育子
 風やバンドネオンと溜息と町田小山 健介
 震災のゴミ水害のゴミ冬近し多摩摩齊田 仁

颯風や人界印す窓の ×昭 鳥坂本 空
 未来への伝言は何紅葉散る 東久留米 佐々木克子
 年忘れ俳句を熱く語りをり府中 笹木 弘
 木枯しのノーモアウオーの声攫ふ府中 佐藤 栄子
 新聞を跨ぐ弱りや木の葉雨調 布佐藤 菜
 凍渡しみわたりしてゐる心地大刈田昭 鳥佐藤 光子
 鯰起し富山の海はけたたまし八王子柴 れいこ
 句帳から秋がすとんと抜けている杉並島 彩可
 大銀杏黄葉の機序かたよらず足利清水 弘一
 着ぶくれて拜む菩薩の薄着かな世田谷鈴木 浮葉
 色づいて鉢に小さい秋が来た立川鈴木かずえ
 敬老日生きる喜び歌に乗せ小平鈴木 寿江
 さびしさをかたちにしたら冬桜小金井鈴木 佑子
 千年を読み継ぐ源氏定家の忌板橋 諏訪部典子
 二十歳より歩みし人は冬の虹小平関 梓
 冬夕焼け自分がいつも誰かのよう調布 芹沢 愛子
 着ぶくれのシニア野球の声太し小平高瀬多佳子

あけぼの集

能面の裏より明る晩夏光あか 西東京 高原 桐
 一列の一円切手文化の日清 瀬谷村 鯛夢
 末尾にはふくらみ持たせ秋手紙 国分寺 玉井 豊
 錦秋にポチと呼びたし埴輪いぬ稲 城 玉木 康博
 二十億 光年の旅 鶴渡る日 野 玉木 祐
 蝶となり蜻蛉となりて行く花野立 川 田村 明通
 冬ざれや斯くも抗ふドニエプル三 鷹 田山 光起
 冬の雨言葉忘れたやうに石武蔵野 津久井 紀代
 冬花火枯れ田一枚起ち上がる 八王子 辻 升人
 ソバージュへア貫く女椿の実清 瀬 寺島 美美子
 不意に晩年しだれ木にして冬桜立 川 遠山 陽子
 冬晴れや連山ぐつと引き寄せる 西東京 戸川 晟
 うろこ雲家族のようで友のよう杉 並 飛永 百合子
 冬桜 無実の獄に半世紀清 瀬 永井 潮
 秋が好き DNA は弥生系 西東京 中田とも子
 木枯こがらし私が捨てたまち立 川 中條 啓子
 手を繋ぎ歩巾合せて息白し 国 立 中野 淑子
 日当りが取柄の住まい花八手座 間 長野 保代

振れる手は振ってばれどは雪の府 中 中矢 温
 立冬の山は和の色立石寺 武蔵野 夏目 重美
 歯刷子と歯ブラシのチュウ春うらら町 田 成戸 寿彦
 其れ其れの「大義」と「正義」冬ざるる 国分寺 南行ひかる
 叡山をひととき焦がし冬落暉 西東京 西川 五月
 小春日や夏井いつきの古名刺 世田谷 西前 千恵
 水巴忌にオオミズアオのきていたり 昭 島 西村 智治
 スーパームーン誰も棲んではならぬ 三 鷹 拔山 裕子
 禰宜のこゑ庭師の声や冬支度 八王子 沼田 博古
 山道を細めたりしや花芒三 鷹 根岸 敏三
 今日ひらく子ども食堂草の花三 鷹 根岸 操
 医師一人患者あまたや日の短か小 平 野口 佐稔
 ワンショット火の酒呷る寒昂羽 村 野島 正則
 冬木となる白樺影を寄せあいて青 梅 萩原 芙沙
 冬来たる言うべきことをきっぱりと 武蔵野 蓮見 徳郎
 向き合ひてははと窓拭く十二月 小金井 平井 葵
 書を閉づる冬三日月を葉とし多 摩 平山 道子
 勤労感謝の日猫の手そつと触れてみる 八王子 広井 和之

あけぼの集

その日まで暮らすこの家小鳥来る調 布藤原はる美
 宿はしぐれ独り窓辺の影に酌む練 馬淵田 芥門
 小樽からの短い手紙雪明り国 立前田 弘
 神の旅まじめな雲が付いて行く国 立前田 光枝
 奥多摩の石垣数多石路の花 国分寺松井 彰子
 噓して正論分裂してしまふ八王子松元 峯子
 えんえんと大泣きをした三橋忌 東久留米 三池 泉
 コンサート帰りに赤い冬薔薇 東久留米 三池しみず
 銀杏の葉踏みしめ一人寺巡り 東久留米 三浦 禎三
 丁髷のあら鍋つつく博多かな小金井三浦 長閑
 夢は夢夢のままや千六本世田谷三浦 文子
 金木屋散つて当面泣くこともなし町 田三木 冬子
 遠富士の見える窓際糸編む 東大和水落 清子
 風花のかなしみ虚空より来る三 鷹水野 星闇
 少女漫画の瞳きらりと十三夜日 野満田 光生
 綿虫が指に止ったから話す昭 島宮腰 秀子
 俳歴というか海鼠が増えている調 布宮崎 斗士
 ずれてゆく話の先の「平和」かな 国分寺武藤 幹

十二月八日生ある限り思うは死 小金井村井 一枝
 兜太笑む銀杏並木の日矢太し岐 阜村山 恭子
 烏瓜色に出やすき嘘と恋熱 海望月 哲土
 鯛焼に程よく詰まる人類愛 東村山森本由美子
 彗星は夕空の笛冬近し三 鷹守谷 茂泰
 外は雨ぶどう一粒手に取りて町 田山崎せつ子
 羽子つきの音は在所の空にあり府 中山本 徳子
 山茶花やひとり夜道のよりどころ 八王子山本ひまわり
 蹇^{あひま}に帰郷叶わぬ軒時雨多 摩山本みつし
 新年やわが身つらぬくもの一つ調 布豊 宣光
 潮鳴りの今日の近さよ枇杷の花稲 城好井 由江
 明日こそ伝えたきこと樽櫂切る三 鷹吉川 真実
 日に三度腹を立てたり師走来る 小金井吉田さとみ
 頭上から包む平和賞いわし雲 東久留米 吉平たもつ
 賑はひを落して静か冬木立町 田米倉 信山
 ころぶなと孫から届く今年米立 川米澤 久子
 ほやほやの飯にバウンド寒卵小 平我妻 民雄
 銀行の鉄扉手強し鳥総松青 梅渡部 洋一

青木 隆
半世紀の「一本の鉛筆」原爆忌
吉平たもつ

一本の鉛筆は五十年前の美空ひばりの歌。この歌を聞くたびに広島原爆で掛け替えの無い方を失われた人々の哀しみが切々と伝わる。定型でない点は気になるが作者の思いに共感した。あれから七十九年、日本被団協にノーベル平和賞が贈られた。

足立喜美子

問診票ですでに反省みみず鳴く

宮崎 斗士

明日は検診日だ。問診票の「はい」「いいえ」の欄にチェックを入れる。日頃の暴飲暴食が祟ってか、この時点で自分の健康状態を反省。庭の隅では発音器官のないはずのみみずが「そうだく」と鳴いている。上五中七の措辞と季語の取り合わせの妙。

穴原 達治

くせ強き地酒のあての衣被

野島 正則

地酒というのは確かに癖が強い。だからこそ、その土地の味わいが楽しめる。衣被は素朴な味わいが、地酒にはピッタリのあてであります。好き者の中には、態々その地にまで出かけるものさえいるというが、酒好きにはその気持がよくわかる。

安西 篤

言の葉は今も直球生身魂

稲吉 豊

お盆に贈物を頂いたお返しとして、当人への忠告を歯に衣着せずする人がいる。よかれと思つてすることだが、しばしば誤解を生みかねない。相手との信頼関係あつてこそ成り立つもの。そんな間柄が強ければ強いほど、言葉はストレートに威力を増す。

飯田 玉記

にく筆の残暑見舞や葉とす

佐藤 光子

今どき珍しい肉筆の便りを葉にするほど感激した気持が伝わる。私は賀状だけは毛筆で出していたがもう止めてしまった。下手でも自筆で届けることの誠意。頂いた方は、作者のようにどれほど嬉しく大切に思うことか。暖かな気分にさせてくれた一句。

石原 俊彦

夕焼の空に逆転ホームラン

笹木 弘

周りに遮るものが無い広いグラウンド。夕方になりかけ其処だけが熱気に沸いている。回も押し詰まり九回裏、二死走者二三塁、打者は今日無安打の8番。初球を振りぬいたボールは茜色に染まる夕焼の中に吸い込まれていった。風景描写に惹かれる。

一ノ瀬順子

原爆忌核を造る手鶴折る手

拔山 裕子

いつも世界のどこかで戦争をしている。「手」は何にでも使えるが、「鶴折る手」に使つて欲しいものだ。亡夫の父も先の大戦で若き兵士として亡くなっている。平和な日常が人々の願いである。終戦の年に生を享けた私は、つくづくそう思うのである。

一関なつみ

帰省子の光と風の通る部屋

戸川 晟

爽やかさと子を迎え入れる温かさが溢れる一句である。ご家庭によつては進学や就職で長期不在の部屋を下の兄弟に譲つたり物置部屋にしたりする場合もあるだろう。掲句の「部屋」は使用者が帰つて来られるための場所であり続けている所がよい。

伊東 類

翅すこし余して止まるてんと虫

佐藤 菜

指先に乗るほどのちっけな虫、天に向かって飛ぶ姿に「天道虫」とも言われ、幸運のシンボルとも目されている。一見するとバタバタと飛んでいるようであるが余裕を持った飛びなのであろう。「余して」は、日常へのゆとりを思い起こさせてくれる。

今田 述

味しめておんなじ言葉ジキタリス

玉井 豊

サッと読んで解らず気になる一句だ。ジキタリスは田畑一作の「薬用植物図鑑」によると花は可憐だが実は劇薬だという。問題は「味しめて同じ言葉」の主語は誰かだ。ジキタリスなのか俳人なのか？ 一編の推理小説を読むのに近い興味が残る。

内田 牧人

風鈴のガラスに映る朝の色

尾崎 太郎

透明感、爽快感、清涼感、の述語を自然な修辭で囁目の物を感覚的に表現した。作者は、その時空を、眼で、肌で、耳で季節を感じて一句を詠んだ。私見乍ら掲句は「人の匂いを感じさせない」佳句です。囁句は「自然俳句を詠む」原点と思う。

尾崎 太郎

参道を横切る蜻蛉午後

水落 清子

お寺或いは神社、どちらでもいいですが、木立に囲まれた参道、秋風の吹く午後、目の前を蜻蛉が一匹すうっと横切って行く。この句から想像してみた風景です。何事も起きない、日常のある一瞬が切り取られています。それがいいと思いました。

小野こづつう

振り花今欲しいのは偶然

前田 光枝

Plan Do Check Actionを繰り返して成功を必然にする、が傍から見るとこの結果も偶然の産物にみえる場合も多い。螺旋状の振り花にはほぼ同数で左巻きと右巻きがあるという、理由は不明とのこと。偶然と必然の関係の妙に何か似ていると思った。

片倉みちこ

翅すこし余して止まるとと虫

佐藤 菜

こういう天道虫の姿をたまに見かける。柔らかい翅が中へ納まらず、少し食み出したまま止まっている。若いゆえ上手く出来ないのか、それともすぐ発とうとしたのか。或いは不器用な御仁なのか。人間にも似たような人がいる。ユーモアたっぷりである。

神崎 幸子

落雷か隣家マンション非常ベル

西前 千恵

異常気象、温暖化、海水温の上昇傾向等を学者は警告し、自然環境の破壊に地球は救いを求めています。掲句も実際に作者の見た光景でしょう。今までにはない豪雨が都内を襲いました。他人事ではないと思ひ、やさしく読めるスマートさがあります。

小泉満知子

新涼の目覚め朝刊届く音

神崎 幸子

早く目覚めた朝は特別静かで、一人の世界。朝刊を配るバイクの音と郵便受けに新聞が入る音。また一日が始まる小さな幸せと安心が伝わる。さあ今日は何をしようか。

小林 育子

旅靴しづかに拭ふ晩夏かな

秋山ふみ子

夏は帰省、観光など旅行シーズン。リュックでもスーツケースでも、靴は旅に欠かせない大切な存在だ。旅をともした靴を拭いて、静かにいたわる作者の優しさが取れる。晩夏の季語に、旅の終わりの軽いさびしさと安堵感も伝わり共感した。

斉田 仁

枝豆一皿つくづく「貧窮問答歌」

亀津ひのと

7世紀から10世紀、律令制時代の民衆は貧しかった。過酷な税の取り立て、戸籍による身分制度、防人への徴兵など……。この社会的矛盾をじつくりと見つめたのが、筑前守の山上憶良だった。「つくづく」という表現が作者の愛。

坂本 空

夏空にあるはずのない雲探す

野口 佐稔

「あるはずのない」が利いている。夏空の真つ青な感じを想像する。本当に真つ青だなあと実感する。そこにはどこか喪失感のようなものもある。雲は何かを象徴しているのだろうか。それは亡くなったかたかもしれないし、過去の日々かもしれない。

佐々木克子

歩くとは誰かに出会う草の花

宮腰 秀子

一日に一回はかならず靴を履いて外に出るようにしている。一人暮しなので特に。目礼のみの人、ちよつと言葉を交す人、もう、こんな花が咲いているよ、今なら石蕨の黄がまぶしい。山茶花も次々に紅白の花をつけ寒空に彩りをそえて自然はいいな。

島 彩可

風鈴のガラスに映る朝の色

尾崎 太郎

風鈴の句には音に着目した句が多いが、視覚で捉えられたことに新鮮味を覚えた。よくよく考えれば風鈴と云えば音が連想されるので、敢えて音を詠むことは無粋なことなのかも知れない。掲句、朝の光にきらめく風鈴の澄んだ音が確かに聞こえて来る。

高瀬多佳子

燕帰る軍港といふ重き海

江中 真弓

旧広島陸軍被服支廠ひろしまに思いを馳せた。この煉瓦造りの巨大な建物では、兵士の軍服軍靴等の製造、貯蔵が行われ、港から戦地へ運ばれた。被爆直後は臨時救護所となり多くの方が亡くなった。今では穏やかな瀬戸の海だが句にあるよう「重き海」である。

田村 明通

まねく灯や踊りの男女みな頭巾

大井 恒行

大國魂神社の祭礼でしょうか。参道に並ぶ提灯や行灯の光と闇が調和し祭りの雰囲気を感じ上げる。揃いの頭巾の一体感と開放感が重なり合い、独特な均衡を醸し出していて胸が騒ぐ。この胸騒ぎの中に潜む不安はなにか。杞憂であってほしい。

田山 光起

またひとり若き友逝く闇の雷

山本ひまわり

このところ、訃報がやたらと多い。それも小学校、中学校からの旧友ばかり。顔が見えるだけに、余計せつない。俳句の作者は「若き友」の死に心を傷める。人の死はいつも卒然と来る。いつ来てもいいように常に覚悟はしておきたい、と思う。

津久井紀代

新涼のサロベツ二十八基の風車

石橋いろり

広大な原野に巨大な風車二十八基が一直線に並ぶ。その中に身を置くと世に起こる小さなことは論外なのだ。この句「新涼の」に注目。「や」では只の風景に終わる。新涼には夏とは違う涼しさがある。風車は作者にどんな風を起こしたのだろうか。

辻 升人

列乱す疲れた蟻は脇へ寄る

永井 潮

今年で八十四歳になりました。六十六年間働き続け、事業は息子に承継したもののこういう経済社会の中、なかなか脇へ寄つて一息という心境ではありません。作者はつかれた蟻という、そしてもう休めという。列乱す奴はもう不要……と。

永井 潮

初夏や嗣治の裸婦発光す

諏訪部典子

藤田嗣治は若い頃フランスに渡り、モディリアーニ、ピカソ等と交流があった。彼らの刺激を受け独自の画風を確立、日本画の技法も取り入れ「乳白色の下地」の裸婦作品はパリを席巻した。掲句は、白く輝く肌の裸婦が初夏の光を浴びているようだ。

新涼や權の奏づる水の音
長野 保代

富山ゆたか

なんと美しい調べだろう。權をこいだ瞬間出た音が離れて遠ざかる。心の中の水音が離れて遠くまで漂っていく。日常忙しく過ごしていると感じ得ないこと。蕪村の「涼しさや鐘をはなるるかねの声」を思い出します。

中野 淑子

夕焼の空に逆転ホームラン

笹木 弘

暑い真夏の夕方、壘員の野球チームが一点差で負けている。手に汗しての応援、九回の裏諦めていたその時、味方に逆転ホームランが飛び出したのだ。

夕焼けに染まって飛ぶ白球、作者の感喜の一声、「やったー」が聞こえてくる。

根岸 操

新盆や蠟燭点しまた消して

大森 敦夫

新盆は故人が亡くなった後、初めて迎えるお盆です。作者のお名前を知るとお仕事をしながら、多摩地区の事務局長を務めていらつしやる大森さん。中七下五の「蠟燭点しまた消して」のフレーズの静けさに悲しみが伝わってきました。

板の間の素足の感触秋が来た
平井 葵

鈴木 佑子

季の移ろいをリアルに素直に読まれた。今年の夏は途轍もなく暑く長く誰もが秋の到来を待ち望んだ。地球温暖化による異常気象の様であるが来年は如何であろうか？ 感覚を研ぎ澄まし一瞬を切り取った一句。現実感と季語の斡旋に戸惑う秋であった。

堀部 嘉雄

重心はぶれず竜舌蘭の花

大西 恵

数十年に一度しか咲かない花である。なかなか見る機会がない。揚句は、この花を見事に自分自身のものにされた。円錐形に張り出した見事な花穂それが「重心はぶれず」である。この把握力に惹かれた。数年前、隣町で見た竜舌蘭が蘇った。

前田 光枝

もういいよなんて言うなよ種茄子

玉木 祐

種茄子という言葉に興味を持ち、動画を見た。褐色になるまで枝に残し、そこから種の取りだしの作業が始まる。その工程で茄子の方から「もういいかげんでいいですよ」なんて言うて来た。「そんなこと言うなよ。また、来年の春必ず会うんだから」

列乱す疲れた蟻は脇へ寄る
三池 泉

永井 潮

蟻もそうなんですね。一列に進んでいたのに、疲れた老いた蟻は列を乱してはいけないうと、脇に寄って休もうとしています。生き物にも知恵があつて、年を取るほど回りのことを気にかけるのでしょうか。私も長生きしているの、蟻と同様の心境です。

三浦 長閑

旅靴しづかに拭ふ晩夏かな

秋山ふみ子

過ぎ去った夏の日の旅の思い出を、静かに愛おしく振り返って居る。中七の表現が響く。

三木 冬子

秋澄むや羽をたたんで眠る友

芹沢 愛子

ようやく空気澄み渡る秋となった。心静かに思うのはきつと永遠に眠る友のことだろう。「羽をたたんで」のフレーズが深く読者の想像力をうながす。鳥、蝶にもなぞらえているところに詩心がある。よく知る生者が居る限りその魂は共にあるだろう。

水落 清子

木犀や日々新しき老いを知る

成戸 寿彦

老いは誰でも初体験である。しのび寄る
老いと、はかない木犀の花との取り合わせ
が見事。黒井千次著『老いの味わい』『老
いの深み』『老いのゆくえ』をこの夏読み
終えて御句と出合った。老いてゆく自分を
客観的に見てゆけたらと思う。

宮腰 秀子

身をよぢりよぢりて百合の散りにけり

片倉みちこ

花はどの花も何れ散るもの、桜の花はひ
らひらと、椿の花は上向きに落花する。牡
丹は大ざっぱに散る。人の一生のように花
の散り方に思いを重ねている作者の、花に
対する観察力に脱帽。百合の花に人生の散
り方まで想像させてくれたような一句です。

宮崎 斗士

夏帽子脱皮の出来ぬ男の子

有原 雅香

まだ蛹、あるいは青虫？ いずれにせよ
心身ともに大人になり切れない少年期のあ
りようを「夏帽子」の斡旋により瑞々しく
表現した一句。この子は、様々な夏の風物
詩と出会うことでだんだんと目覚め、成長
していくのだろう。

森本由美子

ヒマラヤの岩塩けづる衣被

我妻 民雄

昔ヒマラヤ産の入浴用粗塩を使っていた
頃が思い出される。薄いピンクが美しかつ
た。作者はナイフでけずった岩塩を指先で
衣被になすり付けヒマラヤに想いを馳せな
がら熱燗を。こんな緩やかな時間を持てる
世の中が続くことを心から願う。

守谷 茂泰

帰省子の光と風の通る部屋

戸川 晟

夏休みに久しぶりに帰省した子が、子供
部屋の窓を開放した光景を詠んだ句であ
ろう。それまで締め切っていた部屋に光と
空気が通う描写に、親子の再会の喜びが滲
んでいる。子供への思いを、部屋に焦点を
あてて表現しているのが良いと思う。

山本みつし

子どもらの寝入つてからのちろ虫

大槻 正茂

多摩ニュータウンの入居当初、入居者は
陸の孤島を通勤、通園、通学に苦勞し、句
に詠われている状況を見聞きました。団
塊の世代には、懐しい句境を思い出し、感
慨深く鑑賞させて頂きました。「ちろ虫」
がびつたりする句です。

豊 宣光

白桃や傷つきやすき親心

佐藤 栄子

親の心子知らず、という言葉があります
が、その心境でしょうか。子どもが自立し
ていくのはうれしいのですが、親の気持ち
が裏切られるとつらいものです。白桃に象
徴される表現を通して、作者の母としての
子への愛情が感じられます。

吉川 真実

旅靴しづかに拭ふ晩夏かな

秋山ふみ子

「旅靴しづかに拭ふ」に落ち着いた几帳
面なお人柄を感じる。大人数の旅ではなく、
長年連れ添った夫、あるいは旧友、親友、
姉妹との二人旅のような印象を受けた。言
葉に出さずとも心が通じ合える相手との充
実した旅の余韻がしみじみと伝わってくる。

吉田さとみ

帰り道ひとりひとりに丸い月

新井 温子

秋の澄んだ空気は、月の光を一層際立た
せます。月は眺める者ひとりひとりの思い
を受け止めてくれるかのように、静かに浮
かんでいます。そしてその月は欠けない
満月。ひとりひとりにまあるい幸せが訪れ
ますよう……。

言平たもつ
原爆忌核を造る手鶴折る手
坂山 裕子

核兵器のない世界の実現に向けた努力が評価され、日本原水爆被害者団体協議会がノーベル平和賞を受賞することが決まった。標記の作品は、核兵器を造る人、核兵器の使用を阻止する人を的確に表現した。核兵器廃絶の実現を望む。

米倉 信山
さわやかに消え去る夢もありにけり
長野 保代

夢と言えば、老若男女それぞれ色々な夢がありますね。さて、本句はどんな夢を見て詠ったのでしょうか？初恋、失恋の夢の句でしょうか、または、この世とお別れる時の句でしょうか。「夢」から読み手に、様々な解釈が出来るような句ですね。

我妻 民雄
翅すこし余して止まるてんと虫
佐藤 茉

天道虫の赤い艶やかな翅は誰が見ても美しいが、掲句の翅は赤い翅の下にある薄い茶色のうぶな翅のこと。飛ぶには赤い翅をバカんと割り、うぶな翅も使うのだが、止まるには勿論赤い翅をとぎます。時にうぶな翅を仕舞い忘れる。鑑察眼が効いている。

あけぼの便り

○小川葉子様、句評ありがとうございます。 (青木隆)

○狛江市の人、二人になりました。がんばります。 (伊東類)

○谷村鯛夢様、前号に拙句を探り上げて下さり有難うございました。 (尾関英正)

○図書館で角川の「俳句」11月号をちらと読む。角川俳句大賞(「熊ノ蜂」若杉朋哉氏受賞)をめぐる合評での、小澤實氏、仁平勝氏の一物仕立てを評価する、

あまりに些末的な(勿論、俳句は些末主義そのものですが)、殆ど表現に新味やドラマ性のない、と思われる俳句、でも

やっぱりうまいよな、という俳句に対して、対馬康子氏がこれで良いのでしょうか、と納得しない様子の對話が、とても面白く感じられました。(亀津ひのと)

○前号の拙評に作者の飛永さんからご丁寧にお便りを頂きました。三人の方が採られたようです。簡潔で愛情のこもったねじ花の句ですね。

(河順子)

○鈴木佑子様、望月哲土様、前号にて拙句をご講評下さり有難うございました。

(城内明子)

○今日は一日俳句を考えながら秋を感じました。母に追いつけるよう勉強します!! (小泉満知子)

○古いの坂道を必死でころばぬよう楽しんでながらも少し生きてみようと思っております。

(佐々木克子)

○成戸寿彦様、私の「谿若葉」の句をお探り頂き有難うございました。この句はある意味で分かりにくかったと思います。

この古城は現在見られる武家時代の例えば姫路城のようなものでなく私の頭の中にあつたのはヨーロッパ旅行の折に見た

ドイツのお城だったのかも知れません。そんなわけで読み取って頂けて嬉しかったです。

(諏訪部典子)

○明後日入院です。その間俳句を作ろうと思うのですが、きつと短歌になってしまいます。

(高原桐)

○秋は一気に駆け抜けて冬が来てしまいました。年末年始はついこの間だったはずなのに。「あけぼの集」毎号楽しみにしております。よろしくお願いいたします。

(飛永百合子)

○尾関英正様、飛永百合子様、前号で拙句を取り上げ、温かい鑑賞文をお書きいただきありがとうございます。大いに励まされました。

(永井潮)

○向寒の折、皆さまお身体お大切に過ごして下さいませ。
(寺島芙美子)

○いつもはメ切を氣にして予定に入れていたのですが、今回は俳句以外のことで忙しくつい失念。ただでさえもお忙しいご担当にご迷惑をおかけしました。ありがとうございます。
(成戸寿彦)

○渡部洋一様、前号にて拙句をご講評下さり有難うございました。この句は近くの公園にて若い母子を目にした折の句です。私の孫は六人揃って成人いたしました。月日のたつ早さにア然としております。
(西前千恵)

○第42回の多摩地区俳句大会は644句の出句があり、58名の出席で充実していました。今後とも会員の皆様のご協力をお願いいたします。
(根岸敏三)

○「多摩のあけぼの」への出句がメールでもできるように、大変ありがたい。締切日が土日ときなど、郵便だと何日も前に出さなければならぬ。時間があればいい句に恵まれるというわけではないが、締切日までにメールすればいい、というのは精神的にすごく楽。ありがたいです。
(野口佐念)

○編集部の皆様へ感謝申し上げます。根岸敏三様、前号で拙句をおとり下さり有

難うございました。生甲斐を感じます。

(秋原芙沙)

○152号巻頭の『蕪村の句会を覗く』(満田光生氏)の論考の、出典・引用は学術の域にあり、推敲の妙にも感服致しました。蕪村句の多くは、世俗、日常と断絶し、空想的で客観的に構想する手法を選択したが、筆者ご指摘通り、近現代句の写生や私的な世俗とは異なるものです。かかる句にもっと触れたいものです。ぜひ、ご研究の続稿ご披露を期待してやみません。
(淵田介門)

○鈴木かずえ様、新井温子様、前号で「薔薇はバラ」の拙句をご講評下さり有難うございました。こんな句も俳句なのか……と言われた句でした。大変嬉しく拝読させて頂きました。立冬になり寒さを感じるようになりました。編集のみなさまよろしくお願ひ致します。
(宮腰秀子)

○ガザは惨状を極め、来年、米国はトランプ大統領。大変な覚悟をもって迎える新春となります。
(武藤幹)

○本日11月27日はまさに小春日、又寒くなるのでしよう。何かとお世話になります。
(村井一枝)

○編集のスタッフの皆様方、いつもありがとうございます。
(渡部洋一)

第9回 俳句研究会

9月28日(土) 立川市子ども未来センター
担当幹事 根岸敏三・秋山ふみ子・
玉木康博・石橋いろり・
尾崎太郎・石原俊彦

★講話なし
参加者24名

逡巡の免許返納涼新た 秋山ふみ子
箱ひとつ置き配にして秋の風 亀津ひのと
新米がはずかしそうに飯になり 水落 清子
膝に来る猫の体温十三夜 稲吉 豊
風の盆をどる仕草の車椅子 三浦 長閑
番鳩の眠りを包む良夜かな 松井 彰子
葛の花淋しき色にこぼれをり 尾崎 太郎
目のはしの夫の笑顔や秋刀魚焼く 西前 千恵
初紅葉女ひとりの立喰寿司 石橋いろり
名月や盲の犬と愛でにけり 山本ひまわり
ピオロンの響く山寺今日の月 青木 隆
友だちはみんな年寄彼岸花 戸川 晟
線引けばその中に降る「黒い雨」 野口 佐稔
身にしむる手厚い介護二週間 飯田 玉記
築地堀越えたし越せぬ秋の蝶 淵田 芥門
百舌鳥一声弁当箱の箸が鳴る 大森 敦夫
そぞろ寒寄木細工の箱開くる 根岸 操
夏惜しむ宇治の庵の青もみじ 吉田さとみ
車窓から唱歌のごとき青田風 森本由美子

敬老日妻は娘と小旅行 石原 俊彦
能登豪雨揺れて流され曼珠沙華 高瀬多佳子
園児達風船葛の実にはしゃぐ 根岸 敏三
そよ風の独歩の溪谷われの秋 玉木 康博
噴石に斃れし人よ天高し 満田 光生

第10回 俳句研究会

10月26日(土) 立川市子ども未来センター
担当幹事 根岸敏三・秋山ふみ子・

佐々木克子・大森敦夫・
青木隆・山本ひまわり・

尾崎太郎

参加者23名

★講話なし

愚痴こぼす相手なき日の檸檬かな 小野こうふう
踏まれつばなしどんぐりの義侠心 稲吉 豊
ふるさとといえは柿の木つるし柿 佐々木克子
秋深し一人歩けば独り言 亀津ひのとり
少女漫画の瞳さらりと十三夜 満田 光生
故郷の地図を眺めて秋燈下 尾崎 太郎
幸せを仏に告げて秋日和 水落 清子
花カンナ重き祈りの平和賞 田村 明通
放課後の囃子稽古や秋深む 山本ひまわり
運動会星形に抜く卵焼 水野 星閣
備忘録どこに失せたかすがれ虫 三浦 長閑
独り身に孫の手必須秋の暮 飯田 玉記

秋出水歯を食ひしげる能登の民 青木 隆
稲刈りをまつ校庭のバケツの田 西前 千恵
木犀香る絵本をひらくやうに 秋山ふみ子
秋雨の底点滴はアンダンテ 小山 健介
大好きなお姉さんと一緒秋祭 戸川 晟
夕空に群れとぶ掠鳥の影絵かな 松井 彰子
蛤に化けたる雀ちゆんと鳴き 大森 敦夫
近づきしシンギュラリティ秋思かな 齋木 和俊
鱗雲見上げゆつくり歩を進め 山崎せつ子
秋の薔薇淡い少女の顔をして 根岸 敏三
紅葉の速さを競う北の山 森本由美子

第11回 俳句研究会

11月23日(土) 立川市子ども未来センター
担当幹事 石橋いろり・秋山ふみ子・

玉木康博・水野星閣・

満田光生・青木隆・尾崎太郎・

亀津ひのとり

参加者25名

★講話なし

布団干す喧嘩しても晴れたから 石橋いろり
夢も買ふ五年日記を迷はずに 水落 清子
物忘れ二つ重なり枇杷の花 尾崎 太郎
ヒッピーにもどる老女や黄落期 森本由美子
ワイン樽ふかき眠りへ神無月 亀津ひのとり
冬晴れや連山ぐつと引き寄せる 戸川 晟

ついで行く謂れは無いが大熊手 稲吉 豊
過ちを隠しておけず冬うらら 小野こうふう
うそ寒や吾一人なるセルフレジ 吉田さとみ
馬肥えて海馬瘦せゆく年の暮 三浦 長閑
思い出と暮らす安らぎ石路の花 飯田 玉記
冬構え心の窓は閉じるまい 佐々木克子
山国の夕日のやうな風邪葉 大石 雄鬼
口開けて並ぶ埴輪や小六月 水野 星閣
家路行く寒月ひとり友として 松井 彰子
噛みあへる螺子と歯車鳥渡る 幸田 晋
足跡の大小のある刈田かな 根岸 敏三
手に残るハーブの香り冬浅し 秋山ふみ子
丹那抜け初冠雪やパウダー富士 玉木 康博
君ならばとなりのマグロに葱が笑む 小川 紅子
冬の海眺む異国の若人ら 西前 千恵
裸木になりて隣家の灯見ゆ 山本ひまわり
山茶花や世間知らずの詩を残し 齋木 和俊
遠山に日の当りゐて街枯るる 満田 光生
護摩壇への鋼索軌道冬紅葉 青木 隆

府中郷土の森吟行 石川 春兔

十月十三日のよく晴れた日曜日に東京多摩地区現代俳句協会の吟行会が行われました。会場の「府中郷土の森博物館」正門前には数台のキッチンカーが並び、行楽気分を盛り上げています。三連休の真ん中とあって親子連れが次々と訪れています。

正門では案内役の幹事の方が声をかけて下さいました。入園料を払おうとすると「府中市民文化の日」で無料でした。博物館のプラネタリウムも無料投映とのこと。ますます気分が上がってきました。午後一時からの句会会場である博物館の会議室を確認してから、園内を散策し始めました。

園内には尋常高等小学校、町役場、農家や水車小屋など多くの木造建築物が復元されています。ここは子どもが小さい頃、夏によく来ていた場所です。さすがに十月では子ども姿は無く、近くで黄花コスモスが揺れています。そこから奥へ進むと稲刈りが終わり、田んぼとなった田んぼが現れました。田んぼの周りでは、子ども達の脱穀体験会が催されていました。指導役の農家の方が、千歯扱きや足踏み脱穀機の使い方を説明しています。子ども達は、早くやってみ

たくてうずうずしています。

園内の彼岸花の植栽地には四、五本の花が残っているだけでしたが、道々かわいい烏瓜に出会いました。やすらぎの池では、大きな鯉と鴨を撮影するカメラマンと出会いました。池から木道を進み、立派な長屋門を抜けて「ふるさと体験館」へ。農機具の展示を見てから、どんぐりが転がるハケの上の道を戻ります。途中「まいまい井戸」を見学しました。ぐるぐると坂を下った先に井戸があり、覗くと水が見えます。

博物館前では、べっこう飴と飴細工の屋台が出ていて、子どもたちが足を止めていました。ピカチュウやドラえもんが人気です。

予定通り午後一時に句会が始まりました。参加者十六名で二句投句、清記表には三十二句の佳句が並びました。まず、全員の写真撮影が行われました。そして、水野星閣会長のご挨拶後、選句、披講、選評と滞りなく進み、いよいよ表彰式となりました。私の友人で初めて参加された佐藤栄子さんが一位となりました。おめでとうござります。

まいまい井戸に秋日を投げ込みぬ

佐藤 栄子

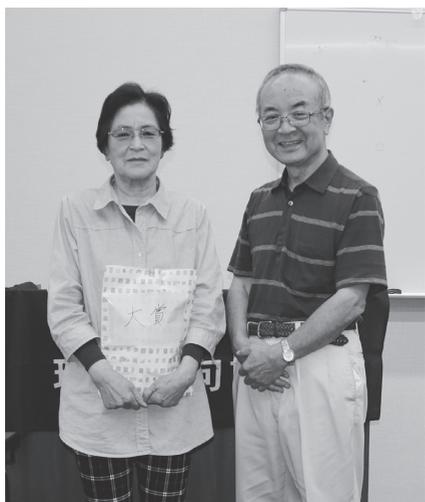
七位までが表彰され、賞品が手渡されました。最後に会長賞が贈られ、和やかにお開きとなりました。楽しい一日でした。ご準備くださいました幹事の方々にお礼申し上げます。

秋の吟行会作品

（上位入選七句）

まいまい井戸に秋日を投げ込みぬ 佐藤 栄子
丘の上に寝て鷹渡る日和かな 亀津ひのとり
背と同じ稲束抱きし子らの列 尾崎 太郎
秋麗の林道たった一人の贅沢 石橋いろり
かやぶきの軒の薪や秋の色 秋山ふみ子
秋の雲形をなぞる子の両手 水野 星閣
稲扱ぎの実習子等の弾む声 西前 千恵

（一人一句）
秋日濃し脱脂粉乳アルミ缶 満田 光生
懸命にベダル踏む子ら刈田原 青木 隆
身に入むや手首探してはぐれ猿 石川 春兔
惚ぶれば花茎ばかりに曼珠沙華 三浦 長閑
曼珠沙華支へ合ひたる五六本 山本ひまわり
天高し町役場までもう少し 戸川 晟
ハケ下の流れとこまで秋暑し 石原 俊彦
眉間に日あたりて曼珠沙華終はる 大石 雄鬼
珪化木にハケの水流年月問う 玉木 康博



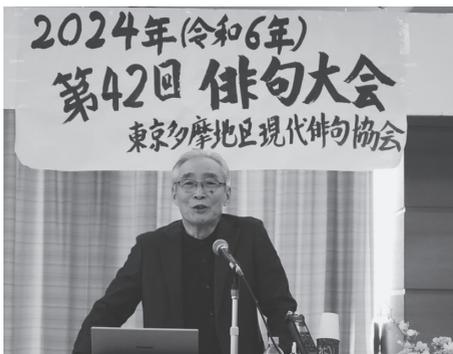
秋の吟行会

令和6年10月13日（日）

府中の森吟行で1位入賞した佐藤栄子さんと水野会長



大会賞の関戸信治さん



秋尾敏先生の講話



来賓の皆さん

第42回東京多摩地区現代俳句協会俳句大会のようす

第42回東京多摩地区現代俳句協会俳句大会

秋晴の十一月四日、中央線武蔵境駅北口武蔵野スイングビルのレインボーサロンに、遠く岐阜県からの方を含め五十八名が参加し俳句大会が開催された。

一時半より満田光生幹事の司会で開始。まず会歌「多摩のあけぼの」を小山健介氏、根岸操氏、秋山ふみ子氏のリードの下、三番まで全員で斉唱。根岸敏三幹事長の開会の言葉、水野星間会長挨拶に続き、来賓の今野龍二東京都協幹事長、羽村美和子千葉県協幹事長、佐藤久神奈川県協事務局長より挨拶をいただいた。

続いて秋尾敏現代俳句協会副会長より「碧梧桐と虚子」という現代俳句のルーツについての講演が始まった。碧梧桐と虚子が京都の第三高等中学校に入学した明治二十七年から大正三年までの二人の俳句を引用され、俳句への取り組みの違いを丁寧に表示された。子規の遺産である近代俳句を、碧梧桐は近代文学として高め、一方、虚子は国民文学として広めた。

俳句大会は、六四四句の出句があり互

選により決定した上位二十名までの入賞作品を発表。俳句大会賞は、二十一点獲得の関戸信治氏の「八月の空へ飛べない鶴を折る」であった。賞状と賞品が授与された。続いて秋尾敏先生、今野龍二氏、羽村美和子氏、佐藤久氏、安西篤氏、宮崎斗士氏を始め二十五名の特別選者による特選賞を発表。選者から賞品が手渡され、ご講評を頂いた。

その後、多摩地区協から、①毎月の研究会参加の呼びかけ、②例年とは異なる東村山での来春三月の総会・陽春句会開催、③あけぼの集投句は従来の郵送に加えメールでの受付体制を整備した旨の連絡があった。現俳協本部事務局からは十一月十六日開催の全国大会の連絡等があった。

最後に戸川晟副会長の言葉で閉会した。

閉会后、会場内で懇親会を開催し参加者間の親睦を深めた。(青木 隆記)



第42回 俳句大会 入賞作品

〈大会賞〉

八月の空へ飛べない鶴を折る

関戸 信治

〈上位入賞句〉

生牡蠣を秘仏のごとく開きたり 桑田 制三
 禽獣と木の実分け合ひ峡に老ゆ 谷川 治
 始発バス乗り込んで来た夏休み 島田 啓子
 ビリ同士ともだちになる運動会 川崎 果連
 子雀のくる木と別れ退院す 根岸 操
 子にもする少しの遠慮実紫 水落 清子
 満月を貰い途方に暮れている 國分 三徳
 ガリ版の句集も混じる曝書かな 永井 潮
 塩加減ほどの幸せ豆ご飯 島 彩可

〈大会選者の特選句〉

秋尾 敏 選
 戦争知らぬ老人たちの秋祭 永井 潮
 今野 龍二 選
 あつぱば何だかいつも楽しさう 稲吉 豊

羽村美和子 選
 奥多摩の石の重さよ星祭 秋尾 敏

佐藤 久 選

山の日や兄の遺影の位置正す 永井 潮

安西 篤 選

年寄に反抗期来る凌霄花 田口 武

前田 弘 選

たまごかけごはんの宇宙今朝の秋 谷村 鯛夢

吉村春風子 選

これからも頼り頼られ団扇風 永井 潮

遠山 陽子 選

ちよい悪の人生でした唐辛子 桑田 制三

三池 泉 選

八月のたましいねむるまで折る 佐々木克子

三浦 長閑 選

母の手の記憶を紡ぐ針供養 小峰トミ子

江中 真弓 選

大きく漕ぐぶらんこに影追ひつけず 田口 武

津久井紀代 選

鬼灯の中はいたつて平和なり 広井 和之

神野 紗希 選

淋しくて唄う金魚がほしくなり 水落 清子

宮崎 斗士 選

みんなのみんなの握力広島忌 麻生 明

水野 星闇 選

鯛雲妻の手となり書く宛名 野口 佐稔

根岸 敏三 選

ビリ同士ともだちになる運動会 川崎 果連

永井 潮 選

フィナーレは宇宙へシグナル大花火 森本由美子

山崎せつ子 選

木樨散る昨日に今日をうち重ね 永井 潮

戸川 晟 選

子の足に名前書く母瓦礫灼け 野口 佐稔

石橋いろり 選

徘徊の母よいづこの眉の雪 淵田 芥門

小山 健介 選

烏瓜ごと人手にわたり本籍地 江中 真弓

根岸 操 選

流れ星うすい枕を裏返す 今野 龍二

蓮見 徳郎 選

遠花火合間に深き無言あり 長野 保代

大森 敦夫 選

階段は秋が左手置くところ 羽村美和子

佐々木克子 選

塩加減ほどの幸せ豆ご飯 島 彩可

事務局だより

○当協会のお知らせ等はホームページからもご覧になれます。運見幹事担当
「現代俳句協会」を検索し、「地区活動」から「関東ブロック」の「東京多摩へ」と進んでください。

★令和七年度定時総会 並びに陽春句会

日時 令和7年3月1日(土)午後1時30分より
会場 東村山市サンバルネ2F
コンベンションホール

(西武新宿線/国分寺線
東村山駅西口徒歩1分)
陽春句会の出句は締切りました

★会員の現況(12月末現在)

218名(正会員171名・一般会員47名)

☆新入会員 2名(敬称略) *印は正会員

*幸田 晋(立川市) *田島健一(昭島市)

◆多摩地区協へのご入会は、随時受け付けております。現代俳句協会会員で多摩地区に在住の方は、会費は無料(新規入会の方は申し込み手続きが必要)。
その他一般の方は年会費2千円です。

お問合せ、ご連絡は事務局(下欄枠内)まで

「多摩のあけぼの」編集担当幹事

青木 隆(隆) 満田 光生(光)

飛永百合子(百) 永井 潮(潮)

◇◇◇◇◇ 案内 ◇◇◇◇◇ 俳句研究会

第2回 2月8日(土) 午後1時

武蔵野市かたらいの道市民スペース

三鷹駅北口徒歩3分

(とじ込みはがきの地図参照)

電話0422・50・0082

第3回 3月29日(土) 午後1時

立川市子ども未来センター

立川駅南口徒歩13分

(とじ込みはがきの地図参照)

電話042・529・8682

第4回 4月26日(土) 午後1時

立川市子ども未来センター

(いずれも会費千円、出句三句)

○初めての方歓迎、見学も自由です。

原稿送り先の変更

「あけぼの集」の葉書の送り先と「二句鑑賞」原稿の送り先は前号から共に青木隆さんです。

郵便料金が10月から変わり、葉書の切手は85円になりました。貼り間違えのないようお願いいたします。

句や原稿はメールでもお受けします。アドレスは、

tamaoakebono@googlegroups.com

編集後記

☆「あけぼの集」投句および一句鑑賞文寄稿ありがとうございます。期限が迫っている場合は、メールなしFAX(042163612272)でいただくと助かります。(隆)
☆昨年は国内外で社会の分断が一層進んだ。多様な価値観を持つ人が交わることの大切さを痛感。俳句は座の文学、現俳協は(俳句自由)、今こそ俳句が力を発揮する時だと思う。(光)
☆ついこの間、辰年を迎えたばかりだと思っていたにもう年末が来てしまっ。子供の頃は、お正月が来るのが嬉しくて仕方なかった。お年玉も無かった時代なのに何故だろう。(百)
☆会員数が減り当地区も運営にゆとりがなくなってきました。一句鑑賞文の執筆依頼も以前は年に一度程でしたが、最近は号を挟んでお願いすることも。短い文章を書く練習のつもりで気軽に感想を書いて頂きたいと思います。(潮)

―題字は三橋敏雄氏―

令和七年一月三十一日発行

発行人 水野屋蘭

編集人 永井 潮

発行所 東京多摩地区現代俳句協会事務局

〒181-0015

三鷹市大沢2-1-10-7

大森敦夫方

TEL 090-9389-4821

E-mail hitemo@yhone.jp

印刷所 株式会社 清水工房

TEL 04226202626